— 起源 Origin —

源流を共にするやきものたち

佐賀県と長崎県にまたがる肥前窯業圏のやきものは、1580年代の唐津市北波多地区で、朝鮮からの陶工が渡来したことにより始まった唐津焼が起源とされます。その後、朝鮮の役（1592年～1598年）でも多くの人々が連れ帰られ、有田、伊万里、武雄などでも陶器の製作が始まりました。

そして1616年に朝鮮陶工で有田焼の陶祖である李参平（りさんぺい）が有田にやって来て、その後有田の泉山で発見された陶石を使って磁器の製作を始めたことで、肥前陶磁器は重要な転機を迎えます。泉山で発見された良質で豊富な陶石は、短期間で有田の磁器産業を発展させ、当時世界的なブランドだった中国磁器にも劣らないほどの美しさと、品質を兼ね備えたやきものを生み出しました。そしてその頃、隣接する伊万里と武雄の一部地域だけが、有田と同じ泉山の良質な陶石を使った作陶が可能だったのです。

同じ原料を用いていた過去がありながら、その後はそれぞれ別の形で発展していった3つのやきもの。個々のやきものの特徴と歴史をひもときます。

有田焼

色絵 柘榴牡丹唐獅子図俗図瓶（明治期）
有田陶磁美術館所蔵

1616年、泉山磁石場はまだ発見されていなかった!?

1616年に陶祖 李参平が、泉山磁石場で磁器の原料の陶石を発見したことで誕生したと思われている有田焼。実は、この年は李参平ら18人の陶工が、弟子や家族など数百人を引き連れて多久から有田に移った年で、当時陶器を生産していた小溝（現南原地区）の窯で、磁器も併せて焼き始めました。

ところが、磁器の原料が尽きてきたため、李参平らは方々を探し回り、1630年前後に泉山を発見。良質で豊富な原料の確保により、白川の天狗谷に窯を築いて、磁器だけの製造を試みました。磁器の大量生産に成功し、皿山繁栄の基礎を築いた功績により、李参平は陶祖として祭られているのです。

有田焼にビジネスチャンス到来

磁器生産の産業化のため、1637年には磁器だけに絞った生産が図られました。その頃世界の磁器市場をリードしていた中国が、明から清への王朝交代の混乱で輸出困難となり、有田磁器もその代替品の候補でした。しかし、当時の初期伊万里様式は形もデザインも中国とは程遠かったため、中国の景徳鎮磁器を模した古九谷様式を完成させ、色絵の技術も確立。

その後、藩は輸出の主力であった高級量産品の生産効率化のため内山に集約し、中・下級品や最高級品生産を外山に移します。最高級品の技術で、後に南川原山で柿右衛門様式、大川内山（伊万里市）では鍋島様式が完成しました。

万国博覧会への出品 有田焼が再び脚光を浴びる

オランダ東インド会社による有田磁器の輸出は、古伊万里様式が作られていた1757年に公貿易が途絶えてしまいました。

しかし、1841年に久富与次兵衛（ひさとみよじべえ）がオランダ貿易を復活させ、以後生産側が海外の好みを直接知ることができるようになったのです。これにより、1867年のパリ万博やその後の各地の万博への出品が続き、伝統的な有田磁器の精巧な絵付けや細工は欧米でも高く評価されました。

一方で万博への出品を契機として、西洋の絵の具や製造機器など先進的な技術導入も積極的に図られ、有田焼のさらなる発展の原動力となったのです。

色絵花束文輪花鉢
（1670～1700年代）
有田陶磁美術館所蔵

そうだったのか 有田焼

有田皿山は藩が政策的に造った工業団地!?

1637年に行われた窯場の整理・統合。有田・伊万里一帯の開拓を担っていた監督官の山本神右衛門重澄（やまもとじんえもんしげすみ）は、山林保護の名目で、有田の窯場の中から7カ所、伊万里の全窯場4カ所を廃止し、826人の陶工を追放します。そして、腕のいい朝鮮人陶工を中心に内山地区（泉山地区～岩谷川内地区）周辺の13の窯場に集め、磁器生産の産業化を主導しました。

泉山にも近く、人工的に新設した内山地区は、導線が単純で、人や物、情報の管理が容易だったことから、窯業の中心地に最適だったのです。

うちやま百貨店

オススメ！

有田町
田代

伝統的建造物群が立ち並ぶ「内山地区」の空き店舗を活用し、有田焼の食器やアクセサリー、飲食物やワークショップなどが出店。この機会に内山地区を歩いてみては。

[日時]11月23日（金・祝）～25日（日） 10:00～17:00
[場所]内山地区のうち、上幸平地区・大樽地区の町屋
[問] ☎0955-25-9230 まちのオフィス春陽堂